

[研究報告]

## オルコット教育理論における超越論的観念論の受容

### — 経験世界拡大の試み —

山本 孝司

#### 【要 旨】

本稿の目的は、19世紀アメリカの超越主義者にして教育実践家ブロンソン・オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) が自らの教育理論にドイツ超越論的観念論を受容していく過程に着目し、教育思想を含む彼の思想の超越論化 (超越主義化) の意図を探ることにある。

オルコットの教育思想に関しては、先行研究においては、1820年代の彼の教育理論は感覚主義的な要素の強く、他方1830年代後半以降の彼の教育理論は超越主義化したという見方が一般的であり、前者には肯定的評価がなされるのに対して、後者に対しては教育理論としてはそれほど高い評価は与えられていない。とりわけ後世の進歩主義教育への影響については、超越主義との思想的連続性が指摘されながらも、そのなかでオルコットの果たした役割は過小評価される傾向にある。

こうした先行研究の評価を再検討すべく、超越主義者オルコットが自らの教育思想の超越主義化に際して、近代ヨーロッパ哲学、殊に認識論をどう受容し発展させたかについて、「経験」をキーワードとして考察することを当面の目的とし、超越主義の教育思想とプラグマティズムを基調とする進歩主義教育との連続性を浮き彫りにする礎石としたい。

キーワード: オルコット 超越主義 経験 超越論的観念論 進歩主義教育

#### はじめに

##### (1) 課題設定

本稿は、19世紀アメリカの教育実践家ブロンソン・オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) の教育思想にかかわる研究である。オルコットは、教育実践家としてだけでなく、アメリカ思想史のなかでは、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)、ソーロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) と並ぶニューイングランドにおける超越主義者として知られる。そのため彼の教育思想は、一般的に、彼の超越主義思想を反映した思想として紹介されることが多い。

思潮としての超越主義の解釈に関しては、人間の本性、自然を礼讃し、身体に対して精神に、(狭義の) 理性に対して直観に、論理に対して非論理に重きを置く彼らの姿勢から、そのロマン主義的色彩の濃さが強調される。こうした解釈に照らしてみると、オルコットの超越主義的教育思想も反知性主義的な面ばかりが浮き彫りになる。オルコットの教育思想

に関しても、1820年代には感覚主義的な要素の強い理論に対しては「新教育」の諸原理として比較的肯定的な評価が与えられている一方で、超越主義思想の反映が鮮明化した1830年代後半以降の教育理論に対してはネガティブな評価がなされることしばしばである<sup>(1)</sup>。評価は置くとしても、先行研究では、1820年代のとりわけチェシャ学区学校におけるオルコットの教育理論および実践と1830年代後半のテンプル・スクールにおけるそれらとの間に彼の思想的変化を認めている<sup>(2)</sup>。

本稿の目的は、巨視的な視点では、1820年代から30年代にかけてオルコットの思想的変化 (「超越論化 (超越主義化)」) の意図を解明することを通して、30年代以降の彼の教育理論が引き続き20年代までの経験主義的要素を保持し得ていたことを示すことにある。

##### (2) 先行研究および考察の視点

本稿の主題であるオルコットに関しては、個人史

(人物) 研究、教育思想研究を中心として、エマソンやソローといったメジャーな超越主義者ほどではないにせよ、相当数の先行研究が存在する。このうちオルコットの個人史については、リアルタイムに彼を知るサンボーン (Franklin B. Sanborn) とハリス (William T. Harris) の手によってオルコットの死の直後に著された『ブロンソン・オルコット—彼の生涯と哲学』 (*Bronson Alcott, His Life and Philosophy*)、1937年にシェパード (Ode11 Shepard) によって著された『行商人の進歩—ブロンソン・オルコットの生涯』 (*Pedlar's Progress, The Life of Bronson Alcott*) が代表的研究であり、後続の研究も基本的には両研究を枕にしたものになっている<sup>(3)</sup>。彼の教育思想に関する研究のうち最も古いものはヘフナー (George E. Haefner) の『A. B. オルコットの教育理論および実践に対する批判的評価』 (*A Critical Estimate of the Educational Theories and Practices of A. B. Alcott, 1937*) で次いでマカスキ (Dorothy McCuskey) が『ブロンソン・オルコット—教師』 (*Bronson Alcott, Teacher, 1940*) を著している<sup>(4)</sup>。日本においては宇佐美寛が『ブロンソン・オルコットの教育思想』 (1976年) を公刊している<sup>(5)</sup>。その他、思想史、宗教史、文学史の領域における超越主義全般を扱った研究の中にオルコットの名前が散見される。こうした先行研究においては概してオルコットの存在は過小評価される傾向にある。彼の教育思想に関しても後に続く教育理論および実践への影響については、否定はされないまでも、ほめかされる程度にとどまっている。

本稿の副題のキーワードとなる「経験」は認識様式の一つである。そのなかには味覚、触覚、嗅覚といった直接感覚器官に訴える直接経験もあれば、象徴、イメージといった形で認識される間接経験もあり、経験の内実は多様である。

教育界においてはカリキュラムを構成する思想原理に関連して「経験」が採りあげられる場合が多い。19世紀末から20世紀初頭に世界的規模で展開した新教育、そのなかでもアメリカにおける進歩主義教育は子どもの生活経験を学びの拠り所とする、いわゆる経験主義教育理論によって支えられていた。この理論の提唱者の代表格がジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) である。先行研究においては、

デューイが子どもの経験を教育行為において尊重する根拠をエマソンの『教育論』を引き合いに出すことで説明したことから、超越主義は進歩主義教育の思想的先駆として位置づけられている<sup>(6)</sup>。

デューイの経験主義教育理論は彼のプラグマティズムの哲学が礎となっており、思想史研究においても超越主義とプラグマティズムとの間の影響関係が指摘される場所である<sup>(7)</sup>。しかしながら、超越主義およびプラグマティズムを、ヨーロッパを含めた近代思想史の大きな文脈のなかに位置づけたうえで、19世紀以降のアメリカ思想の流れとその教育実践理論への投影を描出したものは管見の限り見当たらない。

こうした先行研究の動向を踏まえながら本稿では、超越主義者オルコットが自らの教育思想の超越主義化に際して、近代ヨーロッパ哲学、殊に認識論をどう受容し発展させたかについて、「経験」をキー概念として考察することを当面の目的とし、超越主義の教育思想とプラグマティズムを基調とする進歩主義教育との連続性を浮き彫りにする礎石としたい。

## 1. ピューリタニズム克服のためのイギリス経験論受容

### (1) ユニテリアニズム

オルコットら超越主義者が自らの思想形成を行った背景には、ユニテリアンをはじめとする理神論によるピューリタニズム克服とプロテスタンティズムの自由化の進行があり、その際にロック (John Locke, 1630-1704) をはじめとするイギリス経験論哲学の果たした役割は大きかった<sup>(8)</sup>。ロックは、大陸においてデカルト (R. Descartes, 1596-1650) らがその思考の前提においていた生得観念を否定し、すべての知識の起源を感覚的経験に求めた。周知のように、デカルトの思考法は大陸合理論 (演繹法) と呼ばれ、定理から出発して真理を導き出そうとする思考法であった。こうした思考法に対し、ロックらイギリス経験論の立場に立つ思想家の提唱した思考法は、個別的で所与の事象から普遍的法則、真理を見出そうとする思考法であった。ここでは個別的で所与の事象がもたらす感覚的知覚によって得られる観念が知識と等値され、あらかじめ精神のな

かに定理となる前提的観念を認めない。理神論は宇宙の創造者としての神の存在を認めながらも、宇宙の原則、法則を人間理性によって解説しようとする立場であり、人間理性に重きを置く態度によってこの種の信仰は貫かれている。

18世紀末から19世紀にかけてアメリカのキリスト教を牽引したユニテリアンは理神論の流れを汲み、ロックの認識論を援用することで、ピューリタニズムによる呪縛からの脱出を試みている。17世紀植民地時代以降ピューリタニズムは、原罪説に拠り、人間の卑小性を強調した。これに対し、18世紀末から勢力をもったユニテリアニズムは、ロックの「生得観念の否定」を根拠に、ピューリタニズムの原罪観を否定し人間本性の善性を説いた。

この宗派の代表的神学者であったフェデラルストリート教会のチャニング (William Ellery Channing, 1780-1842) は、人間の内に倫理的能力と自由意志とを認めていた。彼は言う。「われわれは神の能力を信じるのと同じくらい誠実に人間の能力も信じなければならず、人間が神に依存しているものであることと同じく、人間には自由があることも信じなければならない。人間は神のうちに生きるものであると同時に、個性のある存在であることも信じなければならない」<sup>(9)</sup>。彼にとって神は唯一良心を通じ、知識を通じてのみ認識され、したがって、神はすべての誤謬と不完全性とを超越する。神とは人間に与えられた英知の別名であった。1819年にボルチモアにおいて彼が行った説教「ユニテリアン・キリスト教」(Unitarian Christianity) のなかでは、人間と神との「本質的同質性」とそれに基づく人間の「完全性」が説かれているが、こうした人間観を根拠として、人々の知的道徳的覚醒が教育目的として設定された<sup>(10)</sup>。チャニングが超越主義者たちから「我が司祭」(our bishop) と呼ばれていたことから察せられるように、彼のユニテリアニズムの思想は超越主義者たちによって継承されている<sup>(11)</sup>。

オルコット自身はユニテリアンの牧師でも信徒でもなかったが(オルコットの両親はともにエピスコパリアン派に属しており、彼もその流れを汲んでいた。)、1828年にはじまるチャニングおよびその後1836年からの超越主義者たちとの親交を通してユニテリアン的な思想も受容していく<sup>(12)</sup>。もっともオ

ルコットの場合は一足飛びにそれらの思想が超越主義として練り上げられていった。

## (2) イギリス経験論のオルコットへの影響

本稿の主題にかかわるオルコットは、1826年にコネチカット州チェシャ学区学校(the Cheshire District School)の教師になる。チェシャ学区学校教師になる直前から彼は本格的な哲学書を読み始めているが、そのなかにはロックの『人間知性論』(*An Essay concerning Human Understanding*)が含まれていた<sup>(13)</sup>。その影響もあってか、1820年代のオルコット教育理論は感覚主義的要素が強く、ロックの認識論とは親和性のある理論であった<sup>(14)</sup>。この時期にはロックの他、ベーコン(Francis Bacon)、オーエン(Robert Owen)、スコットランド学派の著作にもオルコットは触れていた。これらの人々による著作はみな、チェシャ学区学校を中心とした彼の教育実践を理論化する目的で援用された。すなわち、これらは外的環境の及ぼす精神への影響についてのオルコットの信念を補強するために用いられた。チェシャ学区学校教師時代の日記に示されたオルコットの教育的信条には、「すべての歪んでいて宗教的で人間を抑圧する原理とは縁を切って教えよ。」「帰納的方法により教えよ。」「帰納的方法により教えよ。」という三か条が含まれる<sup>(15)</sup>。周知のようにベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)は、『新機関』(*Novum Organum*)において、アリストテレス以来の論理学体系(オルガノン)を批判的に継承発展させることで、近代科学の方法論を提示した。1820年代にオルコットは、ベーコンの『新機関』で示された帰納法を自らの教授理論に採り入れていた。とりわけベーコンが科学的方法として提示した帰納法の要となる観察という手法をこの時期のオルコットは重要視していた。1830年に発表された論文タイトル『幼児教育の原理と方法に関する観察』(*Observations on the Principles and Methods of Infant Instruction*)はそのことを物語っている。彼はまた、同時期に自分の娘たちの成長発達の様子を観察記録にまとめることを通して、精神と身体との関係を科学的に探究しようと試みている。観察に基づき自然のなかから法則を見出すという帰納的手法は、今日においても「科学」の方法論のひとつに数えられるが、19世紀30年代にあって、オルコット

はこの手法を子ども理解とそれに基づく教育実践理論構築に用いようとした。彼にとって科学は、なにより子どもの精神（良心）の働きを示してくれる手段であった。

ロック認識論の影響に関しては、とりわけ1820年代のオルコットの教育実践において、子どもへの知的情緒的影響を企図して外的環境を整備したり、生活から遊離した抽象的概念の教授と言葉の機械的暗唱に代わって子どもの感覚を通した直接経験に訴えるよう努めていることがあげられる<sup>(16)</sup>。

ユニテリアンたちと同じく、オルコットにとってロック認識論は、教育対象としての子どもの原罪を否定する論拠をもたらしてくれた点で重要な意味をもつ。オルコットは子どもたちの内に神性を認めていたが、こうした善性が生得的であるかどうかは別にして、少なくともロックの教えにより、墮罪の継承というピューリタンの子ども観を否定することができた。

こうしてイギリス経験論は、原罪に代わって人間の運命を統御する外界の力の感覚をオルコットに与えた。しかし、他方で外界の自然法則を統御する人間の潜在力の存在を彼は否定したわけではなく、こうした潜在力が、外的環境、物質的な世界からの感覚知覚から人間を解放する力であると考えていた。つまり、この時点でのオルコットの教育理論は、見方を変えるなら、人間の内と外との関係における矛盾に意識的ではなかったがゆえに、ある一面において科学的で感覚主義的傾向を持ち得たともいえる。

## 2. ドイツ観念論受容による「神域」の保全

### (1) イギリス経験論との決別

オルコットが教育理論構築に援用したイギリス経験論は、ロック以後、バークリ(George Berkeley, 1685-1753)、ヒューム(David Hume, 1711-1776)を経て、認識主体と認識客体との一致という点では、ある種の懐疑主義をもたらした<sup>(17)</sup>。オルコットにとっても、上に述べたように、原罪の生得性を否定する点ではイギリス経験論は有効であったが、他方において、それは不可知的存在としての神を経験世界から閉め出してしまう可能性も秘めていた。実際に彼はピューリタニズムに抵抗し、原罪から人間を

解放することを企図したが、神の存在そのものを葬り去ることは望んでいなかったし、またヒュームのように神の認識不可能性を受け容れることもできなかった。こうした意味合いで、1820年代にロックの認識論に傾倒したオルコットであったが、それを批判的に発展させる必要が生じた。

ロックの認識論では、周知のように、精神の全内容は物質的なものがそれに与える印象に由来することから、精神的なものに対する物質的な優越が認められ、精神は物質に対して二次的な位置しか与えられていなかった。その後、「存在することは知覚されること」とするバークリはむしろ、「物質的実体(material substance) に対し知覚する精神の優位性を説くが、こうした徹底した主観的観念論にあつては、外部が不明なままであり、ヒュームに至ると、精神と「外的対象」(external object) との間の断絶が決定的となる。それにとどまらずヒュームにあつては、外的な実体概念の否定は自我の概念の否定に導かれた。彼にとっては、精神作用としての自我(自己意識)も、個々に因果性をもたない「知覚の束」(Bundle of Perceptions) にすぎなかった。

先に述べたように、オルコットは教育理論において子どもたちへの外的環境からの影響は認めていたが、子どもの精神と外的環境との位置づけに意識的であったとは言い難い。こうしたことを差し引いても、自我(自己意識)の否定となると、人間(子ども)を身体的感覺的存在であると同時に精神的存在と見なすオルコットにとっては、到底受け入れることはできなかったであろう。

1830年代にオルコットはイギリス経験論に関して、ロックの『人間知性論』、ベーコンの『新機関』、『学問の進歩』(*the Advancement of Learning*)を再読するとともに、コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の『省察の助け』(*Aids to Reflection*)『友』(*Friend*)、プラトン(Platon, B.C. 427-B.C. 347)の著作を読み、1836年以降はエマソンらとの親交を通してドイツ観念論哲学に触れる。

こうした刺激の影響からか、1836年の12月8日の日記には次のようにベーコンの帰納法に対する不満が記されている。「午後にバジル・モンタギュー編のベーコン全集に目を走らせた。見事な概念がそこ

にはある。しかし、彼の巨大な評判と、彼のそういうそぶりに求められる生き生きとした生命が感じられない無味乾燥なものである。それについて私は説明できないが、私はベーコンに疑念をもっている。用いられる彼の方法、意のままに繰られる彼の天才には、決して私の完全なる信頼は与えられない。そこには何か欠落している。彼は私に重要な枠組みを与えてくれた。しかしそこには、活気づけ、興味をかきたて、明るく照らす生命が欠落している。彼は決して心に触れることはない。彼は巨大な地図上に真理を位置づけようとするが、その形式には活気づけられ、ある視点を与えられなければならない。私は彼のことを知識の見事な地形学者、不十分な哲学者と呼ばなければならない。彼は遙か彼方に生命と精神とを方式化している<sup>(18)</sup>。

同様に、ロックの素朴経験論では、神と人間の関係を説明するためにオルコットにとっては不十分であった。超越論化が進む以前から、オルコットは教育実践レベルにおいて子どもたちの内に神性を認めていた。そしてこの神性が子どもたちの活動の根拠として位置づけられていた。オルコットは1832年に著した教育論文「経験から推論される早期教育の本質と方法」(*On the Nature and Means of Early Intellectual Education as deduced from experience*)のなかで、「教育は自然と摂理の絶えざる影響により人間の経験のうちに作られたあるプロセスである」という前提に立ち、帰納的方法による自然探究が「今まで見えなかった霊的な創造者」を理解させること、その過程で「自然、摂理、経験が類似的関係に満ちており、これによって子どもの心が創造のエネルギーと保護する愛の源泉まで導かれる<sup>(19)</sup>」と説いている。

結局、オルコットにとって、イギリス経験論は、方法論としては魅力的であったものの、子どもを含めた人間理解とその神との関係を考えるヒントにはならなかったといえる。とりわけ「見えない」神の存在の余地を残しておくことは、子どもたちの内に神性を認めるオルコットにとっては無視できない課題であった。

## (2) ドイツ観念論からの示唆

19世紀ニューイングランドの超越主義に関して

は、その思潮の名称の由来はカント (Immanuel Kant, 1724-1804) の超越論哲学にある。オルコットをはじめ超越主義者の多くは、イギリスのカーライル (Thomas Carlyle, 1875-1881)、コールリッジの思想を経由して、カントの哲学に触れていた。エマソンは「超越主義者」について次のように解説している。「現在このニューイングランドで新しい考え方だと言われているものについて、まず言わなければならないのは、それが新しいものではなくて、思想のなかでも一番古いものが新しい時代の鑄型に流し込まれただけだということです。……『超越思想』とわれわれのあいだで一般に呼ばれているのは、実は『唯心論』です。……現代の『唯心論』が『超越的』という名称を得たのは、もともとケーニヒスベルク生まれのイマニュエル・カントがそういう表現を用いたことに由来します。カントは、理知のなかにはあらかじめ感覚が経験しなかったものは何ひとつないと主張するロックの懐疑論哲学に答えて、非常に重要な一群の理念、つまり権威ある形式があって、これは経験によって生じるのではなく、反対にこれによって経験が得られること、こういう形式は精神そのものの直感だと説き、これを『超越的』形式と名づけたのです<sup>(20)</sup>。

このエマソンの解説からは、オルコット個人のみならず、思潮としてのニューイングランド超越主義全体のロックに対する批判的姿勢が確認できる。周知のように、ロック認識論によってもたらされた経験論と(主観的)観念論とを、カントは対象にではなく、対象を認識する仕方に目を向けることで調停を試みた。カントが経験論から派生した懐疑論を克服できたかどうかの議論は置くにしても、少なくともオルコットらニューイングランドの超越主義者たちにとって、彼の超越論的観念論による「認識におけるコペルニクス的転回<sup>(21)</sup>」は「不可知的なもの」と「可知的なもの」を結びつける重要な視点を提供してくれた。

オルコットは1833年7月に、ニッチ (F. A. Nitch) の著作を通してカントの思想についてはじめて知ることとなる。その時にオルコットは、その本からカントの精神の能力に関する区別を写し取っている。そのメモのなかには、ア・プリオリな直観形式があるというカントの信念、そしてそれらがア・ポステリオ

りに与えられるのではないことについて含まれている。先のエマソンの解説にあるように、ニューイングランド超越主義者たちは、カントの認識のカテゴリー（エマソンの言うところの「精神の直感」）に経験構築にかかわる能動性を認め、これを権威化した。オルコットにとっては、人間（子どもたち）が生まれながらに白紙ではなく、神性を宿す論拠として利用された。『人間文化の教義と学問』（*The Doctrine and Discipline of Human Culture*）のなかでオルコットはこうした直観の形式に関連して「彼自身に関する知識は、その無限のとの関連のなかに、その他すべてのもののアルファベットを含むのである。それは、すべてその他のものがその中でイメージされる宇宙でもある」と説明し、「神の完全で公正なイメージ」がこの形式を通して顕現すると説明している<sup>(22)</sup>。こうして、ロックからヒュームに至って感覚的知覚としてはその存在の確証を見出せなくなった神であったが、直観という認識作用の先験性に神性を付与することによって、オルコットは再びその神域の回復に努めたのであった。

### 3. 「経験」概念の拡大とその教育理論への反映

#### (1) 「経験」概念の拡大

ロックに端を発する認識論的前提、すなわち知覚によってもたらされる感覚経験とそこから抽象された観念のみを知り得、その他は存在しないか、実際は存在していても知ることができないという想定（より厳密に言うならば、こうした想定はデカルト的二元論に由来する）とそこから派生する形而上学的前提、すなわち実在は質や価値、意味をもたない量的なものであり、知ることができるのは量的機械論的世界であるという想定は、科学と宗教との間の分離をもたらした。こうした想定に対しては、ドイツ観念論をはじめその後の認識論において克服が試みられてきた。

このような「近代知」の流れのなかで、超越主義者はロックをはじめとするイギリス経験論への対抗思想として超越論的観念論を受容し、アメリカ土着の条件に順応させるべく、また彼らの関心に沿って、それらに新たな解釈を与えている<sup>(23)</sup>。この「アメ

リカ土着の条件」のなかにはピューリタニズムが含まれており、超越主義者が直面していたのは、ユニテリアニズムに代表される理神論によるピューリタニズム克服後の神の位置づけとそれに対する信仰の問題であった。エドワーズ（Jonathan Edwards、1703-1758）の説教「怒れる神の御手の中にある罪人」（Sinners in the Hands of an Angry God）に代表されるような「怒れる神」の前における「卑小な人間」という安定的な図式をもっていたピューリタニズムでは、神に関連した超越的次元と日常との間に無条件的な結びつきがあった。ユニテリアニズムの人間と神との「本質的同質性」の主張は、人間を暗い原罪の縛りからは解放したが、他方で神や超越的次元の存在は自明なものではなくなってしまった。こうした宗教思想上の流れは、既にみてきたように、背後でヨーロッパからの哲学、殊に認識論の流れと連動していた。

オルコット教育理論における感覚主義的傾向から超越論的傾向への変化もこうした宗教思想、哲学思想の流れに位置づけてみると、彼が自らの教育理論の超越論化によって企図したことが明確になる。それはロックをはじめとするイギリス経験論とは別の知の方法の提示である。それはすなわち非認知的な知をも取り込んだ「経験」概念を示すことであった。この非認知的な知とは、ハンガリーの科学哲学者ポラニー（Michael Polanyi、1891-1976）が『暗黙知の次元』（*The Tacit Dimension*）のなかで「我々は語るができるより多くのことを知ることができる」<sup>(24)</sup>といみじくも指摘しているように、知識の背後に存在している暗黙の次元の知の様式である。カントはこうした次元における認識作用を先験的統覚（*transzendente Apperzeption*）と呼んでいるが、語義通りの経験に先立つ、認識の根拠を先験的な相に置く論理は、先に採りあげたオルコットの言葉に示されていたように、超越主義者たちがその神認識に援用した考え方でもある。

「精神と外界との間の類似は、思考の源泉である」<sup>(25)</sup>と述べ、オルコットはカントの認識における先見性を、人間と外界との「類似」（*analogy*）という概念で説明する。そして、経験の媒介としての外界の対象との交流が、創造者としての神に関する直観的認識とその属性とを提供してくれるとするの

が、オルコットの認識に関する考え方であり、ここでの経験には超越的な視点も含意されることになっている。

## (2) 教育理論への「経験」概念の反映

超越論化の進んだ temple・school 期の実践については『ある学校の記録』(Record of a School)、『福音書に関する子どもたちとの会話』(Conversations with Children on Gospels) の二冊の記録が残っているが、前者の記録者ピーボディ(Elizabeth Palmer Peabody)がこの学校におけるオルコットの教育的意図について触れている。「オルコット氏が、子どもたちに何よりもまず彼らの意識のなかにはっきりと精神世界の概念を描かせようとしたのは、不可知にもかかわらず、そこに永続性とリアリティがあると考えていたためであった」<sup>(26)</sup>。ここに示されるのは、量的機械論的には還元されない、「不可知的なもの」を含めた知の質的な様式を教育実践の要とするオルコットの教育的信念である。

こうした知の質的な様式については、「科学」との対比において、次のように説明されている。「生命は、すべての科学的分析方法から逃れる。事象の全体的な流れを通して、精神的、身体的に脈動しているかすかな力によって、個々の器官と機能は、実質的には修正され、変化する。……天才は、不信心にも残忍なナイフでもって行われた調査、分析すべてを統括し、敬神をもって存在の核心を探らなければならぬ」<sup>(27)</sup>。このオルコットの指摘は量的機械論的なものを唯一の実在と捉える近代の「科学的姿勢」に対するアンチテーゼであり、「科学の世紀」と呼ばれる19世紀にあって彼はこうした警鐘を鳴らしていたといえよう。

そして生命には、意味や価値といった質が含まれており、彼のいうように量に還元する思考法においては捉えられないなにかである。その意味では「感覚的」という意味合いでの経験の埒外に置かれる。それにもかかわらず、量的に還元されない、「不可知的なもの」の認識を教育の最優先課題に設定する背後には、個と全体、普遍的な精神と個の精神にかかわる次のようなオルコットの世界観があったからである。すなわち「普遍的な精神は様々な形をとりながらその本質的生命を失うことなく人間性

のなかに流れ込んでいる。外部の感覚に対して、神の統一は損なわれたり、割られたりすることなく様々な様相で顕現する。そうして、その肉は神聖なる精神と同じであり続ける。一者はわれわれのそれぞれ特徴をもつ個別的な形をとって存在する」<sup>(28)</sup> というものである。

ここに描かれる図式のなかで認識される生命は、個別でありながら全体でもあり、それゆえそれに付随する意味や価値といった質的なものの認識は主観的でもあり客観的でもあり得る。こうした質を「不可知的なもの」として切り捨てず、「経験」の範疇に入れる試みこそ、1830年代後半以降の超越論化したオルコット教育理論の持ち味だったといえる。それは決して字義通りの経験世界からの「超絶」ではなく、経験世界において超越性(不可知的なもの)を積極的に意義づけていくことを通して、新たな「経験」概念を提示していくことに他ならなかった。

こうした図式は彼の経験に関する教育理論においては次のような解説として表されている。すなわち「子どもを取り巻く対象は彼の関心を引きつける。……共感的で訴えかけてくる自然の形式で満たされた初期の経験は才能の起源であり源泉である。芸術家や詩人、哲学者のように、子どもたちも自然に深い関心をもっているため、彼らへの教育によって、こうした経験の存在が保持され、成熟したときに外界を映し出す信心深い鏡となる。彼らの心は純粹で穢れないものである。したがって、真理は、甘美で明快な源泉から彼らのなかに流れ込んでくる。彼らは自然のいきいきとした光のなかで、邪悪に満ちた目によってはぼんやりとしか見えない、こうした深遠な真理をつかむのである」<sup>(29)</sup>。

こうしてイギリス経験論で認識の領域を狭められた経験概念は、カントら超越論的観念論を経由して、オルコットによって教育理論に落とし込まれる際には、精神と自然との供応関係とその背後に神という全体をみるという認識における超越的側面が強調され、単なる感覚的知覚を越境した幅広い概念として再定義された。

## 結語

以上、オルコットの教育理論の超越論化を、彼が

理論構築に援用したイギリス経験論および超越論的観念論の流れに関連づけて、その変化の意図を探ってきた。オルコットの教育理論の装いの変化は、ヨーロッパにおける哲学、殊に認識論の流れに連動しており、ロックの批判的検討という目的でカントの超越論的観念論は受容された。そしてこの受容の過程では、本家のカントを離れて、子どもたちの神性の保障を目的とした「神域」保全の拠り所として、超越論的観念論は、ある意味で、オルコットによって都合よく解釈された。

こうした認識における「神域」の救済は、一方においてピューリタニズムの教条主義を排する意味で科学的視点を含みつつ、他方において「不可知的なもの」を経験の範囲に積極的に関係づけようとした点で、近代の狭隘な「科学」観へのアンチテーゼでもあった。こうしてみると、1830年代後半以降のオルコット教育理論の超越論化は、「経験」概念を拡大することによる新たな経験論の提示という意味合いで、1820年代の感覚主義的傾向の強かった教育理論との間に、「経験」を鍵概念とした発展的連続性をもつとってよいだろう。

なお、19世紀30年代40年代のアメリカにおいて影響力をもった超越主義は南北戦争後には社会を牽引する力を弱め、それにかわって同じドイツ観念論のカテゴリーでもヘーゲル哲学を援用した、前出のハリスらセントルイス学派が力を持つに至る<sup>(30)</sup>。オルコットは晩年、このハリスとともにコンコード哲学学校 (Concord School of Philosophy) を開設しているが、講師のなかの一人には後にプラグマティズムの名称を広めることになるウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) も含まれていた<sup>(31)</sup>。宗教と科学の両立、「神」観念のもつ効用を「経験」の枠内で捉えようとする試みは、このジェイムズによって本格的になされている。「経験」を鍵概念に、オルコットとジェイムズとの影響関係についてみることは、超越主義とプラグマティズムとの関係を読み解くための新たな視点を提供してくれるものと思われるが、これについては機会を改めて試みたい。

## 注

(1) 例えば宇佐美はオルコットの教育思想を総じて高

く評価しつつも、超越論化の進んだ時期のテンブル・スクールにおける教育実践およびフルートランツにおける共同体実験については「神秘主義」、「言語偏重主義」、「ファナティックな禁欲主義」という評言を用いている (宇佐美寛『ブロンスン・オルコットの教育思想』、風間書房、1976)。

- (2) シェパード、マカスキは1830年代後半以降の超越論化の進んだ時期のオルコットの教育理論および実践との共通項を指摘し、両者の間の連続性を認める (Shepard, O., *Pedlar's Progress, The Life of Bronson Alcott*, Boston, Little Brown & Co. 1937/McCuskey, D., *Bronson Alcott, Teacher*, New York, The Macmillan Co. 1940)。他方、宇佐美は「…精神と物質とを二元論的に鋭く対立させて考える傾向が決定的になったフィラデルフィア在住時代以後の彼の思想を……『超越論的』である」とらえてよいであろう (この時期になると、彼をペスタロッチ主義者と呼ぶのは困難なくらい、初期のペスタロッチーの思想との類似は、うすれ消えていったのである) と述べているように、1820年代の初期オルコットの教育思想と1830年代以降の後期オルコットの思想との間の断絶を主張している (宇佐美『ブロンスン・オルコットの教育思想』、195頁)。
- (3) Sanborn, F. B. & Harris, W. T., *Bronson Alcott, His Life and Philosophy*, New York, Noble Offset Printers, Inc., 1893. / Shepard, *Pedlar's Progress*.
- (4) Haefner, George E., *A Critical Estimate of the Educational Theories and Practices of A. B. Alcott*, New York, Columbia Univ., 1937/McCuskey, *Bronson Alcott, Teacher*.
- (5) 宇佐美『ブロンスン・オルコットの教育思想』。
- (6) たとえば次の研究があげられる。市村尚久「アメリカにおける人間形成思想の伝統と革新」長井和雄他著『人間形成の近代思想』第一法規、1982年。
- (7) 小川仁志『アメリカを動かす思想—プラグマティズム入門』講談社現代新書、2012年。
- (8) ロックのアメリカ思想界への影響に関しては、認識論よりも彼の政治思想が先行していた。彼の『市民政府二論』(*Two Treatises of Government, 1690*) は近代における社会契約についての理論書でもあるが、この書で著された自然法の理念はアメリカ独立宣言 (United States Declaration of Independence, 1876) の原理にも流

- れている。
- (9) 後藤昭次「超越主義とエマソン」大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』、南雲堂、1969年、209頁。
- (10) チャニングの説教では、このほかとして三位一体、キリストの神性、予定調和説が否定されている。チャニングの神観念のなかでは、イエスは神より低い位置づけとされながらも、人間の知的道徳的完成は、イエスの人格に近づけることによって可能であると主張されている (Channing, W.E., "The Sunday School," *The Works of William E. Channing, D.D.*, Boston, American Unitarian Association, 1896, p.447-459)。
- (11) 超越主義者のなかでエマソン、リプリー (George Ripley)、ヘッジ (Frederick Henry Hedge)、クラーク (James Freeman Clarke)、パーカー (Theodor Parker) 等は元々ユニテリアン派の牧師であった。このうちエマソン以外は、超越主義者でありながらも既成宗派としてのユニテリアン派の牧師であり続けた。
- (12) オルコットは1828年にプリストルの学校教師をしていた時期にチャニングと知己になる。彼が1834年にボストンにおいてテンプル・スクールを創設する際にチャニングは物心両面の支援を行っている。
- (13) オルコットがロックの『人間悟性論』を初めて読んだのは1819年のこととされる。1817年にイギリスのジェームズ・バーグ (James Burgh) の『人間本性の威厳』 (*Dignity of Human Nature*, 1794) を読んだのがヨーロッパ思想、とりわけ啓蒙主義思想に関心をもつきっかけとなった。
- (14) 他方で、1820年代には『アメリカ教育雑誌』 (*American Journal of Education*) を通してペスタロッチ教育思想にも触れており、この時期のオルコット教育理論における感覚主義的傾向にはペスタロッチからの影響も指摘される。ただしモンロー (W.S. Monroe) が指摘するように、オルコットは直接ペスタロッチの著作に触れることのなかった間接的なペスタロッチ主義者であり (Monroe, W. S., *History of the Pestalozzi Movement in the United States*, Washington, United States Government Office, 1907)、それゆえに彼の教育理論における感覚主義的傾向へのオリジナルな思想的影響としてはロックの方が強いといえる。
- (15) McCuskey, *Bronson Alcott, Teacher*, p.177-179.
- (16) アメリカ教育史のなかでオルコットが新教育 (進歩主義教育) と結びつけて論じられる場合、こうした教育実践が関連の根拠としてあげられている (Shepard, *Pedlar's Progress*. / McCuskey, *Bronson Alcott, Teacher*) 。
- (17) ロックの認識論によって引き起こされた理神論論争、すなわち理性と神の両立が可能かどうかという問いについては、「神が存在するかどうかについては、人間の認識能力を超える」というヒュームの懐疑主義で一応の決着が見られた。
- (18) Alcott, A.B. (ed. by Shepard, O.), *The Journals of Bronson Alcott*, New York, Kennikat Press, 1969, p. 71.
- (19) Alcott, A.B., *On the Nature and Means of Early Intellectual Education as deduced from experience*, 1832 (reprinted in Kenneth W. Cameron ed. *The Transcendentalist and Minerva*, Hartford, CT: Transcendental Books, 1958), p.149-153.
- (20) エマソン (酒本雅之訳) 「超越論者」『エマソン論文集 下』、岩波書店、1972年、19頁。
- (21) カント (篠田英雄訳) 『純粹理性批判 (上)』岩波書店、1962年、33頁。
- (22) Alcott, A.B., *The Doctrine and Discipline of Human Culture*, Boston, James Munroe & Co. 1836, p. 109.
- (23) この「アメリカ土着の条件」には、植民地時代以来アメリカにおいて俗世両方にわたって強い影響力をもっていたピューリタニズムあるいはヨーロッパに対するアメリカの文化的従属状況といったことがふくまれていた。フロシinghamは、超越主義がカントの超越論的観念論にルーツをもっていることを認めつつ次のように指摘している。「ドイツとフランスでは超越論哲学は教養ある人々に所有され、講壇で教えられ、そのなかで思慮深く熱心な人々によって教授されたが、制度の組織もしくは実際の利益という点ではなら社会的影響をもたなかった。旧イングランドにおいては、この哲学は詩と芸術に影響したが、人々の日常生活には触れられないままであった。しかしニューイングランドにおいては、外国の思想家によって企図されたこの思想は、それは自国の土地で根づいて、社会生活のあらゆる形で最盛期を迎えた」 (Frothingham, O.B., *Transcendentalism in New England*, New York, Harper & Brothers, 1876, p.105)。

- (24) マイケル・ポラニー (佐藤敬三訳) 『暗黙知の次元』紀伊国屋書店、1980年、15頁。
- (25) Alcott, A. B., *On the Nature and Means of Early Intellectual Education*, p. 132.
- (26) Peabody, E. P., *Record of a School--Exemplifying the General Principles of Spiritual Culture, Second Edition With an Explanatory Preface, and other Revisions*, Boston & New York, Russell, Shattuck & Co. 1836, p. 25.
- (27) Alcott, A. B., "Orphic Sayings," *The Dial* vol. 1, (July, 1840), New York, Russell & Russell, 1961, p. 93.
- (28) Alcott, A. B. (ed. by Shepard, O.), *The Journals of Bronson Alcott*, p. 77.
- (29) Alcott, A. B., *On the Nature and Means of Early Intellectual Education*, p. 134.
- (30) 山本孝司「19世紀アメリカ教育思想における超越論的観念論の受容と変遷—A. B. オルコットとW. T. ハリスの教育理論から読み解く—」『教育新世界』第62号、2014年、20-29頁。
- (31) 山本孝司「A. B. オルコット教育思想の発展—コンコード哲学学校時代を中心に—」『九州教育学会研究紀要』第40巻、2012年、33-40頁。